

病理検査室の窓辺から

略語を使った病名

斉藤 隆三

PCL 飯田橋 病理・細胞診センター

長々とした単語を使った用語はしばしば略語にして使用することがあり、よく使われる略語ではその意味するところは理解できる。たとえば「MLBの大谷翔平選手がMVPに選ばれた」という文章なら略語の内容はわかる。身の回りにはIT, QR, ATMなど多くの略語が氾濫しており、日常的に使っているために、もとの正式な単語が何であるか失念してしまうことすらある。そういえば2023年度の皮膚科専門医認定試験にSDGsの正式名を問う問題があった。

臨床の場合でも医学用語を略語で表現することがしばしばあり、長い診断名では、単語の頭文字を使った略語で表現することが多い。COVID-19やAIDSのように広く使用されているものでは支障はないが、1つの臨床科内で使われる略語がほかの科の人に通じるかどうかは定かではない。先日、病理組織検査依頼書(以下、依頼書)の臨床診断名で「TKA後の皮膚結節」というのがあった。このTKAが何を意味するのかわからなかったが、依頼医師が整形外科医であったので、その領域の略語を調べてtotal knee arthroplasty(人工膝関節全置換術)であることがわかり、病理診断の参考にすることができた。

臨床症状をみていない病理医にとって、病理診断には臨床の情報がたいへん重要であり、臨床診断名や臨床症状の記載をみてどのような疾患が考えられているのかを頭に入れ、病理組織所見を観察している。その依頼書をみてみると、略語の臨床診断名で書かれていることがある。脂漏性角化症のseborrheic keratosisはSKと略しているが、これをseb.kera., Seb-Kと書くことや、ゼボケラと仮名書きをしている依頼医もあり、皮膚科内ならそれでもわかるが、病理医が理解してくれるのか心配になる(なお、SKをsolar keratosisの略語としている医師もいる)。

病理組織所見から病理診断が確定できる病変であれば、臨床の情報がなくとも不都合はないが、病理診断に苦慮するような所見を呈している場合には臨床の情報が重要な診断根拠になるため、ぜひ臨床情報の提供をお願いしたい。少なくとも臨床診断名は略することなく、記載してほしい。略語はあくまでも簡便な用語として使用しているものであって、正式な用語ではない。手元にある略語辞典で調べてみると、皮膚科領域で頻繁に使われているAD, AK, LP, SKなどは掲載されていなかった。同じ診療科内ではお互いに理解できる略語であっても、病理医が皮膚疾患の検体をみるときに、その略語の意味が理解できているのかは疑わしい。たとえば、VVは皮膚科領域ではverruca vulgarisであるが、外科領域ではvaricose veinsとして用いられているように、1つの略語が何通りもの用語に解釈できることがある。また、診断名にPNというのがあり、通常はpolyarteritis nodosaの略語として使用しているが、これをpigmented nevusの略語とする医師もいる。

略語には一定の法則がないため、略語で書かれた診断名が依頼医の意図している疾患であるかわかりにくいことがある。病理診断の精度を上げるために、依頼書の臨床診断名を略語で書くことは避けてほしい。